人権通信

2025年度　第2号

城ノ内中等教育学校人権委員会・レベラーズ部

こんにちは、人権委員会です。期末考査もようやく終わり、冬休みやクリスマス、お正月といったイベントを楽しみにしている人も多いと思います。

さて、今回は51・54ホームルームの人権委員の皆さんに、人権講演会と人権意見発表会の感想を書いてもらいました。また、「中・高生等による人権交流事業」に参加している方から、研修会のようすを報告してもらいました。

「同和問題」という言葉を、私はよく知っていて、理解しているつもりだった。だが講師先生から、同和地区に住んでいたというだけで差別されていたというお話を聞いて、私は分かっているつもりになっているだけだったということに気がついた。というのも、私は「ある場所に住んでいるだけで差別される」という事実を、どこか遠いことで、他人事のように感じていたからだ。しかし、講師先生のお話を聞いて、そのような心持ちが新たな差別をうむことにつながるのではないかと感じた。心のどこかにある「自分は関係ない」という気持ちが、誰かを悲しませることになるのだと思う。多くの人が「自分は関係ないかも」と逃げていった結果が、現在も根強く残っている同和問題や、職業で優劣をつけるというような差別につながったのだろう。誰もが差別を自分のことのようにとらえるのは難しいことかもしれないが、重要なことだ。今日からそのことを意識していきたい。

講師先生のお話を聞いて、同和問題が今もなお身近にある問題なのだと気づいた。今まで同和問題については何度も人権学習の中で学んできたが、徳島県にもかつて部落として差別された地域があったことや、今もその差別に苦しんでいる人が徳島にもいるということは知らなかった。差別に苦しんできた当事者としての話を聞いて、部落差別が深刻な問題であるのだと初めて身にしみて実感した。講演の中で、地域の人どうしの会話の中で当たり前のように差別の発言が出てきていたことが最も印象的だった。もし自分が耳にしていてもあまりに自然だったので聞き流してしまっていたかもしれない。実際には差別は日常の何気ない会話の中にあるのだと気づき、急に周囲の会話が恐ろしくなった。差別的な発言であっても普段と異なるわけではなく、差別だと気づくには聞く方の注意が必要なのだと思った。

私がこの講演を聞いて問題点だと思ったことは、表面的には差別がなくなっているように見えても、心理的差別、特に結婚・就職などのときに現れる差別意識が根深く残っていることだ。現代ではSNSが発展し、自分が知らない間に差別してしまうこともあるため、学び、普段から意識することが大切だと思った。同じ人間なのに住む場所が違うだけで何の違いがあるのか、という言葉を心に残しておきたい。

私は今回の講演を聞いて、同和問題がこんなに身近にあるのだということを知ることができました。特に印象に残っているのは、講師先生が自分の彼女の父親にあいさつにいった話です。「同和地区の生まれじゃないのか」と父親が聞いたとき、私はこんなことを言う人がいるんだと思いました。しかし、それは私が同和問題についての教育を受けてきたからだと思います。また、私は講師先生の父親の仕事を聞いたとき少し引いてしまいました。よく考えるとその仕事が私達を助けてくれると分かるのにです。講師先生が言ったように無知・無関心が差別につながっていくのだと思います。私は彼女の父親が講師先生の父親の仕事に関心がなかったことや、同和問題についてよく知らなかったことがこのような発言につながってしまったのだと思います。このようなことをもうおこしてしまうことがないように、より多くのことに興味・関心を向けていきたいと思います。

私は、「中・高生等による人権交流事業」中部ブロック生徒部会における研修の一環として「車いすサポーター養成講座」を受講しました。

3人1組で、交互に車いすに乗ったり、押したりしました。

実際に乗ってみると、歩いているときには気にならないような小さな段差や溝でのつまづき、階段の上り下りに恐怖を感じました。押してみたときも同じような不安を感じ、また距離感の違いにもとまどいました。

講座を受講して、車いすの性質をよく理解することや、声かけや協力の大切さを知りました。この日感じたことを忘れないようにしていきたいです。

51・54ホームルームの人権委員の皆さんの意見はどうでしたか？生徒の皆さんも、この機会に人権問題について考えたり、家族と話したりしてみてください。

この人権通信が、人権について考えるきっかけになればと思います。